

マスカン語の基礎語彙 (1)*

二ノ宮崇司
(筑波大学)

s0430062@u.tsukuba.ac.jp

1 はじめに

筆者は 2010 年 8 月 7 日から同月 17 日にかけてエチオピア連邦民主共和国、南部諸民族州、グラゲ・ゾーン (Gurage zone) のブタジラ (Butajira) でマスカン語 (Mäsqaṅ, Mesqaṅ) の調査を行った。これはマスカン語の音声と文法を記述し、グラゲ祖語を再建するための足がかりである。今回、基礎語彙を収集したほか、人称代名詞のパラダイム、動詞のパラダイムなどの調査も行った。

マスカン語はグラゲ・ゾーンに分布する言語である (図 1 参照)。系統的にはエチオピア・セム語派の中でも南エチオピア語、外周南エチオピア語、tt-グループに属する (図 2 参照)。外周南エチオピア語には、tt グループと n グループがあるが、これは主語が 2.sg.f., 2.pl., 3.pl. 時の主節動詞標識 (Main verb maker) が n であるか、tt であるかによって決まる。Hetzron (1977: 23) によれば、tt グループの特徴は主節動詞標識が tt であるだけでなく、単語中何れかの非舌頂音 (non-coronal) を円唇化させる内的円唇化 (Internal labialization) の存在、名詞の複数形の語形生の希薄さにあるという。ちなみに内的円唇化は非人称の時に使用される。以下 Hetzron (1977: 46) の内的円唇化の事例を挙げる。

yädärg (3.sg.m.) 「彼が叩く」 → yädärg^w- (非人称)

yägädär (3.sg.m.) 「彼が置く」 → yäg^wädär- (非人称)

* 本調査は平成 22~25 年度科学研究費基盤研究 (B) 「変容するエチオピア諸言語の静態と動態に関する総合的研究、ならびにデータベース構築」代表: 柘植洋一 (金沢大学) (課題番号 22401046) によるものである。調査に至る過程で被調査者の AH 氏をはじめ、Mulugeta 先生 (アジス・アベバ大学) にはご助力いただいた。これらの方々に感謝申し上げたい。本稿で用いる略号は次の通りである。2 = 2 人称、3 = 3 人称、sg. = 単数、pl. = 複数、m. = 男性、f. = 女性。

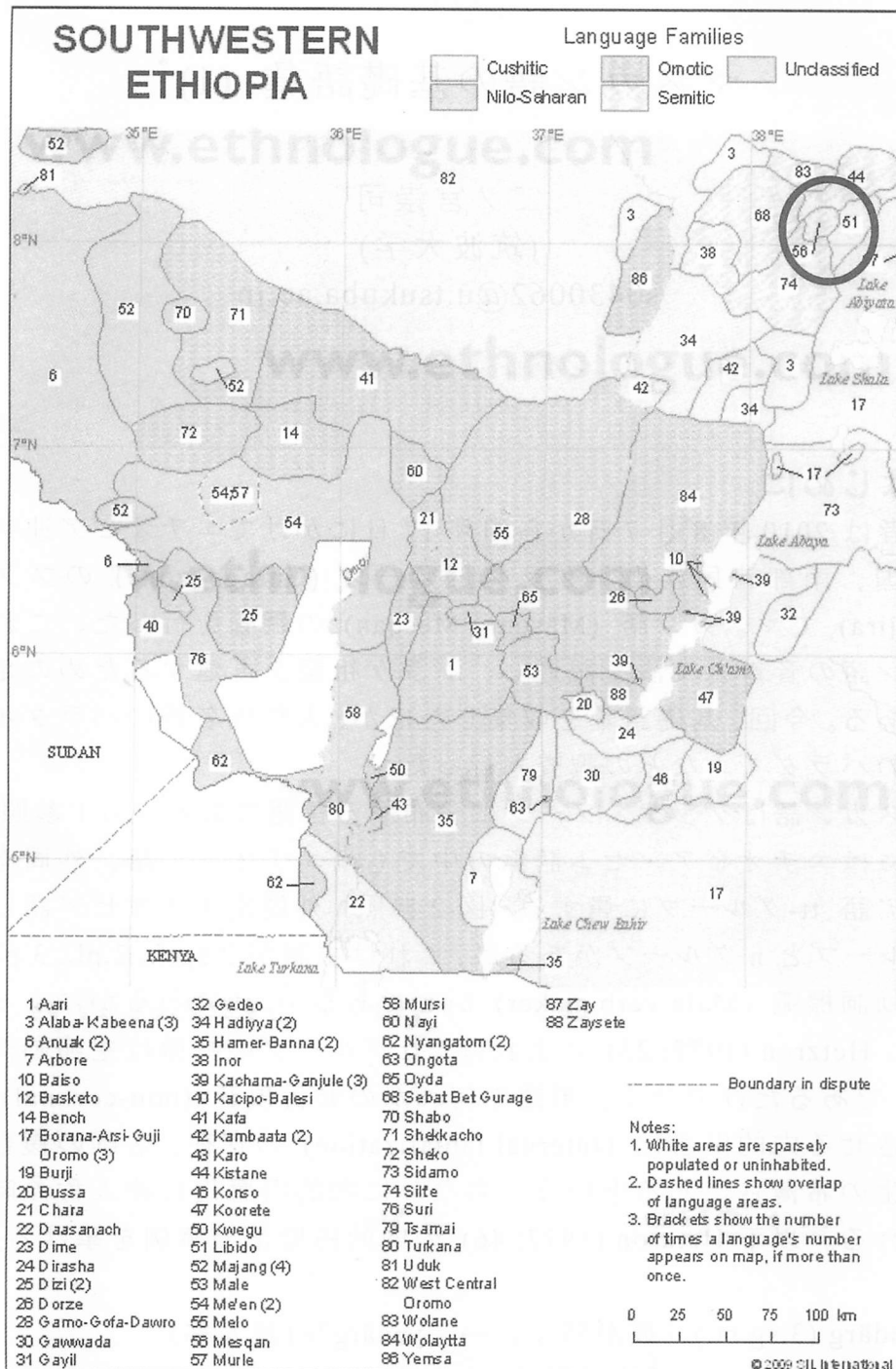


図 1: エチオピア南西部の地図

Gordon (2005) を基に作図 (○で囲った部分がマスカン語使用地域である)

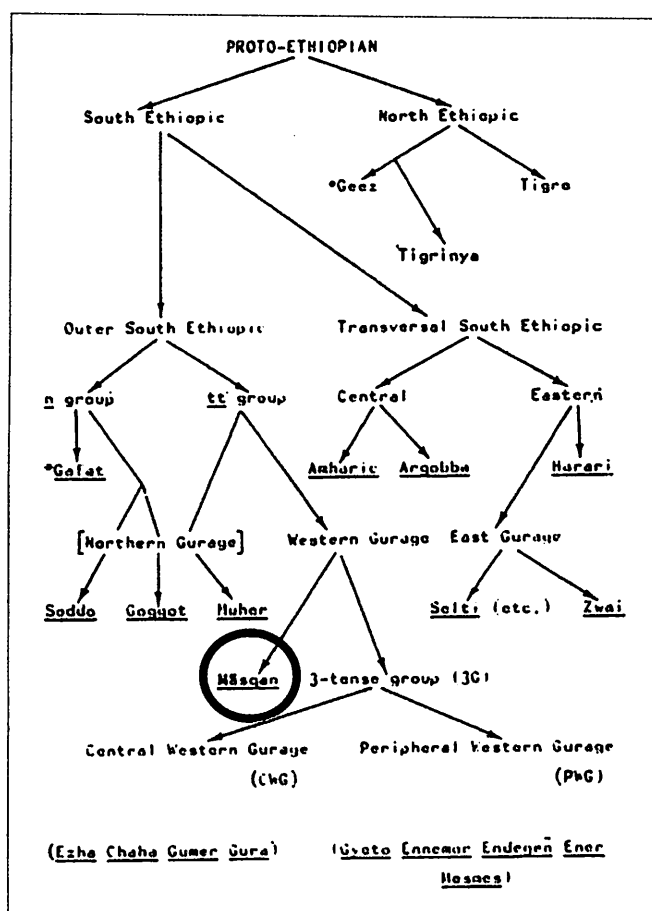


図 2: エチオピア・セム語派の系統図

Hetzron (1977: 17) を基に作図 (○で囲った部分がマスカン語)

本研究の被調査者によればマスカン語は文字に書かれることはなく、学校で教育されることはないという。

本稿の目的はマスカン語の基礎語彙を音声表記で示し、分節音の音声的あるいは音韻的特徴を示すことである。Leslau (1979) は極めて音韻的な表記でマスカン語の単語を表記しており、これまで音声表記による表記は見られなかった。単語の音声的実態を知る上で、音声表記は欠かすことができないと思われる。本稿は分節音を記述の対象にし、高低アクセントや強弱アクセントといったプロソディーを記述しない。

2 先行研究

Leslau (1979) はマスカン語の基礎語彙を、Hetzron (1976) はマスカン語の口承テキストを示しているが、マスカン語の音声あるいは文法の体系的な研究は管見の及ぶ限り見られない。

以下に Leslau (1979) の母音目録 (図 3) と子音目録 (表 1) を示す。
 ちなみに稀な音は () で囲われている。

i	ə / (ə̃)	u
e	ä	o
	a / (ā)	

図 3: 母音目録 (Leslau 1979: xxi)

表 1: 子音目録 (Leslau 1979: xxii-xxiv)

	両唇音	唇歯音	歯-歯茎音	硬口蓋-歯茎音	前硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	b		t d			k g	(ʔ)
鼻音	m		n	ɲ			
流音			r l				
摩擦音	f		s z	š ž		x	h
接近音	w				y		
破擦音				č ğ			
円唇化音	b ^w	f ^w				k ^w g ^w x ^w m ^w	
口蓋化音						k' g' x'	
喉頭化音			ɬ	č		q q ^w q'	

3 調査方法

今回の調査データは 2010 年 8 月 7 日から同月 17 日にエチオピア連邦民主共和国のブタジラで得たものである。今回協力を得た被調査者はブタジラで生まれ、現在ブタジラで生活している AH 氏である。AH 氏は男性で調査時点で 52 歳であり、言語形成期をブタジラで過ごした。話すことができる言語はマスカン語、アムハラ語、英語であり、書くことができる言語はアムハラ語と英語であるという。

録音は静穏な部屋で、Edirol R-09HR (Roland 製) にダイナミックマイクロフォン SM58SE (Shure 製) を接続して行った。マイクロフォンにはウィンドスクリーン A58WQ-BLK (Shure 製) を装着した。Wave 形式にてファイル化、サンプリング・レートは取り込み時点で 44,100Hz、量子化 16 ビットであり、モノラル録音を行った。

単語調査の際、被調査者にはあらかじめ英語とアムハラ語で書かれた単語を見せ、その単語の意味を正しく理解しているかどうかを確認した。その上で、マスカン語の発話を 3 回してもらった。単語を収集する際、アジア・アフリカ言語文化研究所 (1979) の語彙リストを利用したが、今回の調査では 0346 「煮る」まで収集した。

4 基礎語彙

以下にマスカン語の基礎語彙を音声表記で示す (表 2)。左端の数字はアジア・アフリカ言語文化研究所 (1979) の番号である。形式には筆者による音声表記の単語を示し、その後に Leslau (1979) の形を示す (L と省略する)。本稿では 1 番から 100 番までを示す。

表 2 : マスカン語の基礎語彙

番号	意味	形式
0001	「頭」	[gun:ən] / gunnan (L: 784)
0002	「髪」	[gun:ən] / gunnan (L: 784)
0003	「ひたい」	[gəmbar] / fənčä (L: 779)
0004	「眉毛」	[k'ərəb] / qərrəb (L: 806)
0005	「目」	[ən] / en (L: 757)
0006	「涙」	[imba] / əmba (L: 756)
0007	「耳」	[ənzən] / ənzən (L: 761)
0008	「鼻」	[əmfun ə] / äfunna (L: 753)
0009	「口」	[a:f] / af (L: 753)
0010	「唇」	[kəmfər] / kənfär (L: 791)
0011	「舌」	[al:əmət] / allämät (L: 756)
0012	「つば」	— / Leslau (1979: 764) によれば əttəff 「つば」という単語を単独では使用しないという。使用するには、əttəff barä 「つばを吐く」 (L: 764) という形で使用されるという。
0013	「歯」	[sən:] / sənn (L: 812)

0014	「あご」	[gunɬɔʔ] / gunçä (L: 784)
0015	「ほお」	[dɛŋgɛ] / danga (L: 776) 被調査者によれば特に口の中を示しているという。
0016	「ひげ」	[ɕɛŋgʷowɛt] / šängʷäbät (L: 815)
0017	「顔」	[ift] / ift (L: 754)
0018	「首」	[aŋget] / angät (L: 759)
0019	「喉」	[gʷɛrɛrɛ] / gʷärärä (L: 785)
0020	「肩」	[məm:ɛr] / mämmär (L: 797)
0021	「背中」	[g'inɕɛ] / g'əñžä (L: 787)
0022	「腰」	[laβa] / laba (L: 793)
0023	「尻」	[k'in] / q'ən (L: 808)
0024	「胸」	[dɛrɛt] / därät (L: 778)
0025	「乳」	[t'ub] / tɔb (L: 818)
0026	「腹」	[dɛn:] / dänn (L: 776)
0027	「へそ」	[kʷ'arɛ] / qʷärä (L: 806)
0028	「腕」	[xəra] / xərrä (L: 793)
0029	「ひじ」	[humme] / humma (L: 788)
0030	「手」	[ɛɕ] / äg (L: 755)
0031	「指」	[at'eβɛt] / aɕɛbät (L: 764)
0032	「爪」	[t'ɛfər] / tɛfər (L: 940)
0033	「足」	[ɛgər] / ägər (L: 754)
0034	「ひざ」	[gulwɛt] / gulbät (L: 783)
0035	「肝臓」	[hawɛt] / häbəd (L: 788)
0036	「心臓」	[çin] / x'in (L: 793)
0037	「はらわた」	[jɛdɛnə gəwər] 「腹の物」(jɛ-「の」、dɛnə「腹」、gəwər「物」) / dänn (L: 776) 「腹」、gəbər (L: 782) 「物」
0038	「皮膚」	[goga] / goga (L: 783)
0039	「汗」	[uzat] / wəzat (L: 826)
0040	「垢」	—
0041	「膿」	[mægəl] / mægəl (L: 795)
0042	「毛、体毛」	—
0043	「脂肪」	[mora] / mora (L: 798)
0044	「血」	[dɛm] / däm (L: 776)
0045	「骨」	[at'əm] / aɕəm (L: 764)

0046	「肉」 (flesh)	[bəsər] / bäsär (L: 769)
0047	「体」	[gəg] / gäg (L: 783)
0048	「病氣」	[baçə] / bašä (L: 769)
0049	「傷」	[maza] / mäza (L: 800)
0050	「薬」	[tə'əza] / çəza (L: 774)
0051	「米」	[ruz] / ruz (L: 809)
0052	「粉」	[k'ama] / qäma (L: 804)
0053	「塩」	[as:o] / asso (L: 762)
0054	「油」	[zəjt] / zäyt (L: 830)
0055	「酒」	[arək'e] / aräqe (L: 762)
0056	「タバコ」	[təmbəho] / təmbaxo (L: 817)
0057	「味」	[t'am] / —
0058	「におい」	[sutənət] / sutännät (L: 814)
0059	「食べ物」	— / yib'äre qar 「食べる物」 (L: 806)
0060	「肉」 (meat)	[bəsər]
0061	「卵」	[aŋk'ʷa] / aŋq'ä (L: 759)
0062	「鶏」	[kut'əna] / kuttäna (L: 792)
0063	「鳥」	[aŋf] / äf' (L: 753)
0064	「翼」	[kaŋfa] / kanfa (L: 791)
0065	「羽毛」	— / zoyä (L: 830)
0066	「巢」	—
0067	「くちばし」	—
0068	「つの」	[k'en:] / qänn (L: 805)
0069	「牛」	[ara] / äram (L: 762)
0070	「小刀」	[golodo] / golodo (L: 783)
0071	「刀」	[senda] / sända (L: 812)
0072	「刃」	—
0073	「棒」	[ənt'ar] / ən̄tar (L: 760)
0074	「弓」	[dəgan] / dägan (L: 775), qäst (L: 807)
0075	「矢」	— / yäqäst qälät 「弓のヤリ」 (L: 804)
0076	「ヤリ」	[k'alət] / qälät (L: 804)
0077	「糸」	[fətəl] / fätəl (L: 781)
0078	「針」	[mərəf] / märef (L: 798)
0079	「着物」	[ləβas:] / læbas (L: 793)
0080	「紙」	[wərək'at] /

0081	「物」	[zəŋga] / zānga (L: 829)
0082	「蛇」	[ənd ^w ədərə] / əndəwädärä (L: 758)
0083	「虫」	[tɕərə] / čərä 「虫の一種」 (L: 772)
0084	「ハエ」	[zəmb] / zəmb (L: 828)
0085	「蚊」	—
0086	「ノミ」	[k'ənatɕ'] / qənač (L: 805)
0087	「シラミ」	[k'əmal] / qəmal (L: 804)
0088	「あり」	[gonda] / gonda (L: 784)
0089	「魚」	[asa] / asa (L: 762)
0090	「貝」	—
0091	「動物」	— / awre 「野生動物」 (L: 765)
0092	「獺」	[otɕa] / očča (L: 752)
0093	「網」	—
0094	「犬」	[g'ija] / gəyā (L: 786)
0095	「網」	[wədərə] / wädärä (L: 822)
0096	「ひも」	[s'iwago] / —
0097	「羊」	[at'e] / äte (L: 764)
0098	「馬」	[farəz] / fārāz (L: 780)
0099	「豚」	[asama] / asama (L: 763)
0100	「しっぽ」	[fan.tɕu] / fanču (L: 779)

5 分節音の特徴

上の単語から次のような母音が観察された (表 3)。

表 3 : マスカン語の母音

[i]	0017 [ift]
[e]	0005 [e:n]
[a]	0089 [asa]
[ɑ]	0061 [ɤk ^w 'ɑ]
[o]	0092 [otɕa]
[u]	0039 [uzat]
[ɐ]	0030 [ɐɕ]
[ə]	0007 [ənzən]

[ɑ] は 0061 [ɤk ^w'ɑ] だけでなく 0027 [k^w'are] のようにその直前の

子音が [kʷ] の時に観察された。

Leslau (1979) で挙げられている中舌の [ɐ] [ə] が本研究でも観察された。

Leslau (1979) によればマスカン語には ǎ, ǎ という鼻母音が観察されるというが、0009 ǎfunna (L: 753)、0063 ǎfʷ (L: 753) の事例を観察したところ、鼻母音の代わりに鼻音が表れていた (0009 [ɛmfun ɐ] 「鼻」、0063 [amf] 「鳥」)。

マスカン語の子音には次のようなものが観察された (表 4)。

表 4：マスカン語の子音

[b]	0048 [baçə]
[t]	0056 [təmbəho]
[d]	0074 [dəgan]
[dʷ]	0082 [əndʷədərə]
[k]	0010 [kəmfer]
[g]	0088 [gonda]
[m]	0049 [maza]
[ŋ]	0063 [amf]
[n]	0023 [kʷin]
[ŋ]	0015 [dəŋgə]
[r]	0051 [ruz]
[r]	0098 [farəz]
[β]	0079 [ləβas]
[f]	0077 [fetəl]
[s]	0058 [sutənət]
[sʷ]	0096 [sʷiwago]
[z]	0054 [zejt]
[ç]	0016 [çəŋgʷowət]
[ç]	0036 [çin]
[x]	0028 [xəra]
[h]	0035 [hawət]
[w]	0080 [werekʷat]
[j]	0037 [jədənə gəwər]
[l]	0070 [golodo]
[tʃ]	0083 [tʃərə]

[ɕ]	0030 [vɕ]
[t']	0057 [t'a:m]
[k']	0004 [k'ərəb]
[kʷ]	0061 [ɸ kʷ'a]
[kʰ]	0023 [kʰ'in]
[tɕ]	0050 [tɕ'əza]

マスカン語で [t'], [k'], [kʷ], [kʰ], [tɕ] という放出音が観察された。Hogan (1976) などによれば放出音の音響的特徴として解放破裂の後に空白部分が見られるという。本研究の放出音の事例を見ても解放破裂の後には空白部分が見られた¹。

Leslau (1979) で *ɕ* と記述されているもの (例えば *šängʷäbät* L: 815) は [ʃ] より [ɕ] に聞こえる。また *ɕ* の口唇形状を確認したところ、[ʃ] 特有の円唇性は見られなかった。そこで本稿では暫定的に [ɕ] と記述した。これは有声破擦音 *ɕ* 無声破擦音 *ç* も同様である。すなわち本稿は *ɕ* を [ɕ]、*ç* を [tɕ] と記述した (0030 *äg* [vɕ]、0083 *čərə* [tɕərə])。

Leslau (1979) が語中で *b* と記述するものには 0022 [laβa] (*laba* L: 793), 0031 [at'eβet] (*aṭebät* L: 764), 0079 [ləβas] (*ləbas* L: 793) のように [β] として実現するもの、0035 [hawət] *häbəd* (L: 788), 0037 [(jədənə) gəwər] *gəbər* (L: 782) 「物」のように [w] として実現するものがある。これらは母音間で [β] あるいは [w] として実現しているが、0034 [gulwət] (*gulbät* L: 783) のように [l] と母音の間でも [w] が見られる。ただし 0006 [imba] (*əmba* L: 756) のように [m] と母音の間では [b] が観察された。ここから直前に [m] がある場合を除く有声音間で音素 /b/ が [β] あるいは [w] として実現している可能性がある²。これは音素 /b/ の有声音間での弱化と考えられる。

6 おわりに

本稿の目的はマスカン語の基礎語彙を音声表記で示し、分節音の音声的あるいは音韻的特徴を示すことにあった。Leslau (1979) との

¹ Praat ver.4.2 で放出音の原波形とスペクトログラムを目視した。

² 異音 [β] は同じく外周南エチオピア語のイノル語 (Inor, Ennemor) でも見られるが、Hetzron & Berhanu (2000: 10) によれば、[β] はイノル語において徐々に消失していると指摘されている。siβsəβ 「集める (完了形)」では β が現れているのに対し、səβsiβ 「集める (指令形)」では現れていない。

関連において特筆すべき点は以下のとおりである。

Leslau (1979) が鼻母音として記述したもの (例えば *ã*) は鼻音として実現していた。

Leslau (1979) が *š*, *ğ*, *č* として記述したものは後部歯茎摩擦音というより、歯茎的硬口蓋音として実現している可能性がある。

Leslau (1979) が語中で *b* と記述したものは弱化しており、[β] あるいは [w] として実現していた。

本稿は分節音を記述の対象としており、高低アクセントや強弱アクセントといったプロソディーを記述してこなかった。今後はこれらの要素も記述したい。またアジア・アフリカ言語文化研究所 (1979) の語彙リストを 0100 まで記述したが、引き続き 0346「煮る」までを音声表記で示していきたい。

【参照文献】

- アジア・アフリカ言語文化研究所 (編) (1979) 『アジア・アフリカ言語調査票』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Gordon, Raymond G. (2005) Southwestern Ethiopia. In: Raymond G. Gordon (ed.) *Ethnologue: Languages of the world*. Fifteenth edition. Dallas, Texas: SIL International.
- Hetzron, Robert (1977) *The Gunnän-Gurage*. Napoli: Istituto Orientale di Napoli.
- Hetzron, Robert and Berhanu Chamora (2000) *Inor*. München: Lincom Europa.
- Hogan, John T. (1976) An analysis of the temporal features of ejective consonants. *Phonetica* 33: 275-284.
- Leslau, Wolf (1979) *Etymological dictionary of Gurage (Ethiopic): Individual dictionaries*. vol.1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.